

櫛形町文化財調査報告書 No.1

# 曾根遺跡

1984. 3

櫛形町教育委員会

## 序 文

曾根遺跡は櫛形町の西北に位置する上宮地地内にあり、以前より縄文式土器・土師器等の出土していた関係者周知の遺跡であります。昭和58年度に、同遺跡を含む農地侵食防止事業が実施される事になり町教育委員会では工事に先立ってこの遺跡の発掘調査を実施することになりました。その結果、今から4,000年～5,000年以上前の縄文式土器、約1,600年ほど前の住居跡・土括・土師器等が発見されました。これらの貴重な資料が今後、本町の歴史をひもとくいとぐちとなり、町の発展を願う町民意識の向上に役立つ事を願っております。

最後に、今回の発掘調査ならびに報告書の作成にあたりご指導・ご協力いただきました皆さんに、心から感謝申し上げる次第でございます。

昭和59年3月16日

櫛形町教育委員会

教育長 上田幸齊

## 例 言

- I 本書は農地災防防止事業に伴う曾根道彦の発掘調査報告書である。

I 発掘調査は昭和59年9月1日から同年10月末まで実施した。出土品の整理等は昭和59年2月1日から同年3月24日まで行った。

I 本報告書作成は清水が担当し、石器の実測、トレースは大森、田村が、縄文式土器の描影、トレースは百瀬、田村が、土師器の測量、トレースは渡川、吉岡、清水が行った。また遺物図面の図版作成は出口、清水が行った。

I 本報告書の編集は清水が行い、執筆の文書は本文に記したが、開文土器は百瀬が、右器は大森が、その他は清水が主要に担当した。

I 遺構・遺物図版中における指示は次の通りである。

①遺構図版中、水系レベルは海抜高を示す。

②遺構図版中、スクリーン、トーンの指示は次の通りである。  
は遺構（伊址）、  
はローム塊、

③遺物図版中、スクリーン、トーンの指示は次の通りである。  
は赤色塗彩部位を示す。

I 発掘調査、遺物整理において下記の方々に御助言、御協力を賜わった。記して謝意を表する次第である。

関根幸夫（東海大学教授）近藤英夫（東海大講師）末木篤（黒教義文化説）新井健、坂本英夫、保坂廉夫、木田明順、中山誠二（山梨県埋蔵文化財センター）田中英、御堂正馬（神奈川県埋蔵文化財センター）庄々木暮康、日向尚之、六糸山造営清算団、上宮地土地改良区、上宮地農業組合、川崎建設㈱

I 発掘調査参加者 清水博（町教委）田村大輔（明治大卒）百瀬忠幸（東海大卒）成瀬晃司、福内秀樹（日本大卒）秋田かな子、桑折礼子（東海大卒）和田恵、鶴生隆（東海大）伊丹聰（明治大）藤本芳原（山梨学院大卒）長瀬義人（創造大）名取泰祐（山梨大）浅利哲（玉川大）川端和也（駒沢大）鷹揚陽、川崎将人、野中龍、清水市平、野中芳吉、小佐勝治、東条洋道、飯野武典、金丸秀明、齊藤きみえ、源原みさ子、金丸ひろみ、町堀裕文化協会会員研究部

I 筑堤作業参加者 清水博（町教委）田村大輔（明治大卒）百瀬忠幸（東海大卒）渡川峰大（国学院大卒）大森能志（明治大卒）吉岡弘樹（東海大）出川真由美（武藏野大卒）徳尾和江、齋藤啓子、刃谷幸子、齊藤みや子、上田みな子

I 研究に係る事務は鶴田一雄（町教委社会教育係員）が掌管した。

I 遺物調査によって作成された図版、及び土器類は、運用町教育委員会において保管している。

四  
六

序 文	
例 言	
I 査定に至る経過	1
II 遺跡の概観	4
III 査定の概要	4
IV 遺 墓	5
1. 住居址	5
(1) 1号住居址	5
(2) 2号住居址	5
(3) 3号、4号住居址	7
2. その他の遺構	7
(1) 壱火状遺構	7
(2) 土 坪	10
(3) 墓地遺構	10
(4) ピット群	11
V 造 物	12
1. 純文時代の遺物	12
(1) 土 器	12
(2) 土製品	23
(3) 石 器	24
2. 弥生時代・古墳時代の遺物	36
VI 成果と課題	28

博 爱 四 次

第1図 遺構位置図、周辺断面分布図  
 第2図 遺構地形図  
 第3図 遺構記述図  
 第4図 1号住居址及び竪方、2号住居址延長方  
 第5図 3号住居址及び竪方、同上、4号住居址  
 第6図 1号穴式遺構、1号～5号土塁  
 第7図 1号～5号出土遺構  
 第8図 第1ビット群  
 第9図～第14図 縄文時代の遺物……土器(1)～(6)  
 第15図 縄文時代の遺物……ミニチャア土器、土製品  
 第16図 縄文時代の遺物……石器  
 第17図 古墳時代の遺物……土器

四 版 次

第一回版 曾侯遺跡遺景（南西上望也）  
 第二回版 1号、2号住居址  
 第三回版 出土遺物……土器  
 第四回版 出土遺物……石器

## I 調査に至る経過

櫛形町上宮地区は本町の西北に位置し古くから養蚕を中心とした農業地帯であった。地区的平均傾斜度が $15^{\circ} \sim 30^{\circ}$ という急傾斜であるため土壌の侵食が甚だしく桑、果樹等の樹木の根が洗い出されている所も多く見られる。又排水路がない為降水時には道路が排水路がわりとなってしまい、道路が狭少で急坂のため、洗掘され悪路となり、農耕車の通行にも支障をきたしている。これらの急傾斜地帯の土壌の侵食を防止して農業經營の安定と合理化をねらいとして、県営による農地侵食防止事業が実施される事になった。町教育委員会では、そのうちの上宮地21号承継新設工事に伴い、文化財保護法に基づく埋蔵文化財発掘調査を山梨県農務部・狹中土地改良事務所の負担金と、昭和58年度埋蔵文化財発掘調査に係る文化庁及び山梨県教育委員会の補助を受けて実施することになった。しかし、本年度町教育委員会では、住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財（六科山遺跡）の発掘調査を委託しておりその調査と重った関係から調査員、作業員の確保に困難を窮めたが、原因者である上宮地土地改良区のご理解と県教育委員会文化課の指導、工事施工者の川崎建設株式会社のご協力を得て、9月1日に発掘調査に着手した。当初2週間の調査予定であったが、調査の過程で多くの遺構が検出され、多数の遺物が出土したため、予定期間を大巾にうわまわったが10月末日で無事調査を完了する事ができた。

（鶴田）

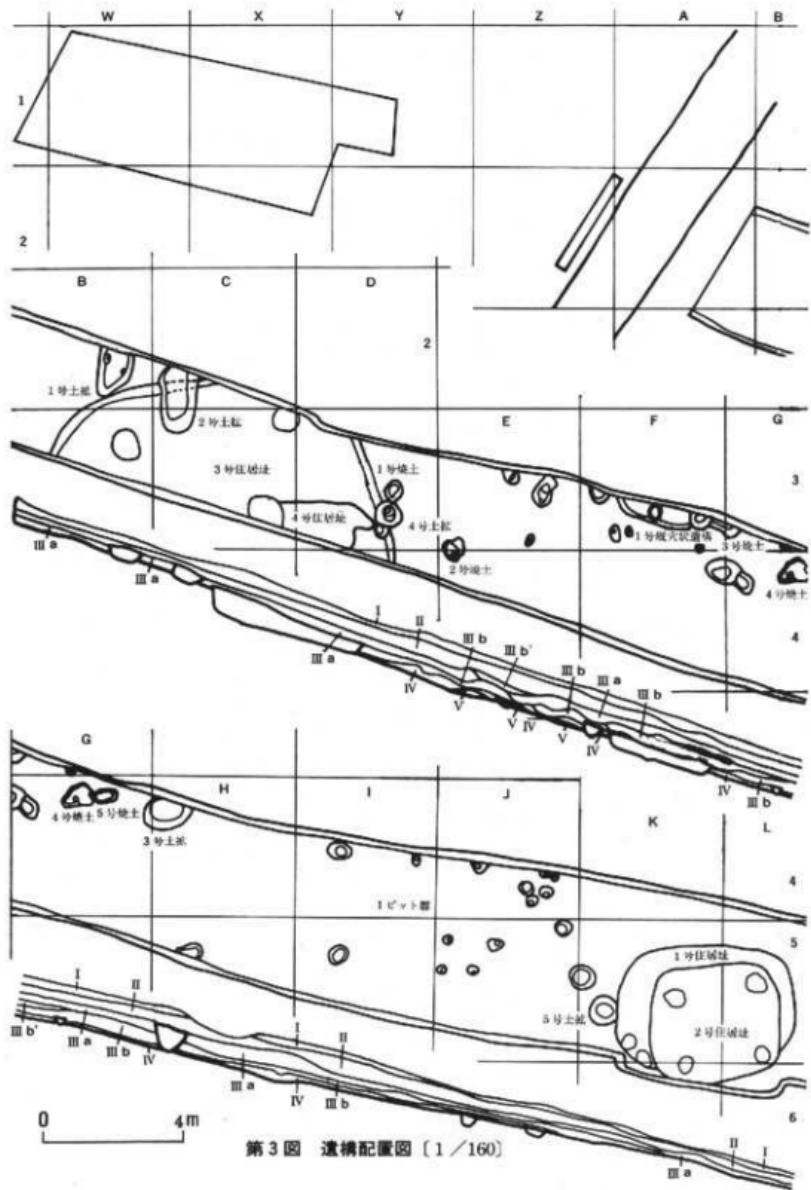


- 1—曲輪田遺跡 2—高尾遺跡 3—伊奈・湖遺跡 4—上杉林遺跡 5—北新居遺跡 6—神明遺跡 7—御坂A遺跡 8—御坂B遺跡  
9—曾根遺跡 10—伝嗣院原遺跡 11—東原A遺跡 12—東原B遺跡 13—長田口遺跡 14—中須遺跡 15—原田遺跡 16—傳城跡  
17—下河原遺跡 18—古里敷遺跡 19—物見塚（抜塹）古墳 20—月上遺跡 21—道下遺跡 22—井戸原屋古墳 23—道上遺跡  
24—大須遺跡 25—佐原1遺跡 26—佐原2遺跡 27—富士塚古墳 28—河原遺跡 29—十五所遺跡 30—六科山遺跡 31—六科山古墳  
32—平岡遺跡

第1図 遺跡位置図、周辺遺跡分布図 [1/50,000]



第2図 遺跡地形図 (1 / 1,000)



## II 遺跡の概観

曾根遺跡は、甲府盆地の西縁に位置する中巨摩郡櫛形町上宮地字曾根地籍に所在する。櫛形町名の由来とする櫛形山は南部フォッサマグナ地帯に属する巨摩山地の中心部を占め、その東麓には洪積扇状地が地殻変動を受けて形成された市之瀬台地が発達し台地前端は比高差約120mを有する断崖によって甲府盆地と区別されている。遺跡は市之瀬台地前端、下市之瀬断層崖下部に発達した小台地上に位置し、從って背後に洪積台地を負い、前面に沖積地を望む地点に存在する。またこの小台地の南、北両側には小谷が刻み込まれ、その為この小台地は東向き緩斜面で水利に恵まれた良好な条件を有している。この小台地一帯は「全国遺跡地図一山梨県」<sup>注1</sup>に、曾根遺跡（散布地）として記載されている周知の遺跡であり、今回発掘調査された地点は、そのほぼ西端部にあたる。

「全国遺跡地図一山梨県」によると櫛形町には29ヶ所の遺跡が記載されている。町内東半を占める台地上では縄文時代以来の遺物が多量に採集されている。台地の氾濫原内の微高地には南隣甲西町の住吉遺跡をはじめとして、弥生時代後期以降の遺跡の存在が知られている。<sup>注2</sup>また台地前端の円頂状高まり上には、前期古墳（物見塚古墳、六科山古墳）<sup>注3</sup>が存在し、これら以外にも甲西町塚原に隣接する下市之瀬を中心としてかつては多数の後期古墳が存在していたものと考えられる。以上の様に櫛形町内には台地上、微高地上と立地によってその時代、内容を別としつつも数多くの遺跡の存在が確認されているが、これら町内に存在する遺跡の中で本格的な発掘調査を受けたものは、物見塚古墳、六科山遺跡（同古墳）について、本遺跡が三件目であり当地域における埋蔵文化財の調査・研究はやっとその途についたというべきであろう。今後、町内における遺跡の全体的な把握と共に、各遺跡の内容を明らかにする事が、櫛形町の歴史を解明する上で重要な課題となろう。

（清水）

## III 調査の概要

今回上宮地21号承認道新設工事を延期した区間は延長250mにわたるが、その両端部は乗用開闢時に含礫層まで削平を受けていた為、比較的原地形の残る中心部約100mを発掘区とした。発掘区は、工事基準杭を利用し、磁北に従い4mグリットを設定した。グリットは南北に南からW、X～A、B～S、Tとし、東西に西から1～6と名付けた。

8月下旬、調査担当者立会のもと抜根作業を行い、9月1日より発掘作業に入った。遺物包含層は比較的浅いという想定のもと、人力による耕土作業を行ったが、農道南のW～Zグリットおよび発掘区北半部のMグリット以北はすでに含礫層まで削平が行われており、耕土を排除したのみで調査区域から除外した。

中央部基本土層は5層に分けられた。第Ⅰ層は耕作土。第Ⅱ層は茶褐色上層で、粘性しまり

共に弱く、黒褐色土粒を多く含む。第III層は黒褐色土層で、粘性は弱いがしまりが強く、黒褐色土粒を含む。III層は更に小礫の混入の多いa層、小礫の混入の少ないb層に2分した。第IV層は暗茶褐色土で粘性が強く、しまりはIII層に比しやや弱い。第V層はローム層で、厚さは最も堆積の厚いところでも40~50cmである。第VI層は赤褐色含礫層、第3図にはあらわれないがローム層の下部に存在する。またIIIa層とIIIb層の中間に黒褐色含焼土層(IIIb'層)がみられIIIb層に焼土の混入したものと考えられるが平面的に落ち込み等を明確にはし得なかった。

このうちIIIa~IIIb層にかけて大量の土器(縄文式土器、弥生式土器、土師器)が出土し、全点ドット方式でとりあげた。B~Cグリットにかけては土器の集中と重なって部分的に疊の集中を認めたが、遺構であるとの認定はし得なかった。本遺跡における土器の出土は大部分がIIIa~IIIb層、及び3号住居址覆土にかけて認められIV層では出土数は激減する。また平面的にはBグリット~Hグリットに集中し、Iグリット北ではまばらになる。1号~3号土括はIIIa層上面で、2号を除く焼土遺構、4号土括はIIIa下部~IIIb上面で認められた。住居址はIIIb層中で検出されたがその立ち上がりがIIIa層に入るかは確認できなかった。5号土括、第2ピット群はIV層中から掘りこまれている。

(清水)

## IV 遺 構

### 1. 住居址

#### (1) 1号住居址(第4図、図版II)

5K、5L、6K、6Lグリットに位置し、2号住居址を切って構築される。北東隅が削平され完存しないが、平面形は隅丸長方形で、長軸4.8m短軸3.5mを測り、主軸方位をN-2°~Wにとる。壁高は西壁で30cmを測るが東壁は削平を受け遺存しない。壁は北、西壁では急角度に、南壁では緩やかに立ち上る。覆土は5層に分けられ自然堆積を示す。床面はほぼ平坦につくられており、遺存は悪いが中央部と壁沿いには堅緻な部位を残す。ピットは3ヶ所検出されたが柱穴は確認できなかった。深さはP<sub>1</sub>-5cm、P<sub>2</sub>-28cm、P<sub>3</sub>-9cmである。周溝は南西隅に検出され、巾10~15cm、深さ5~10cmを測るが、南壁沿いでは壁より15cm程内側に設けられる。

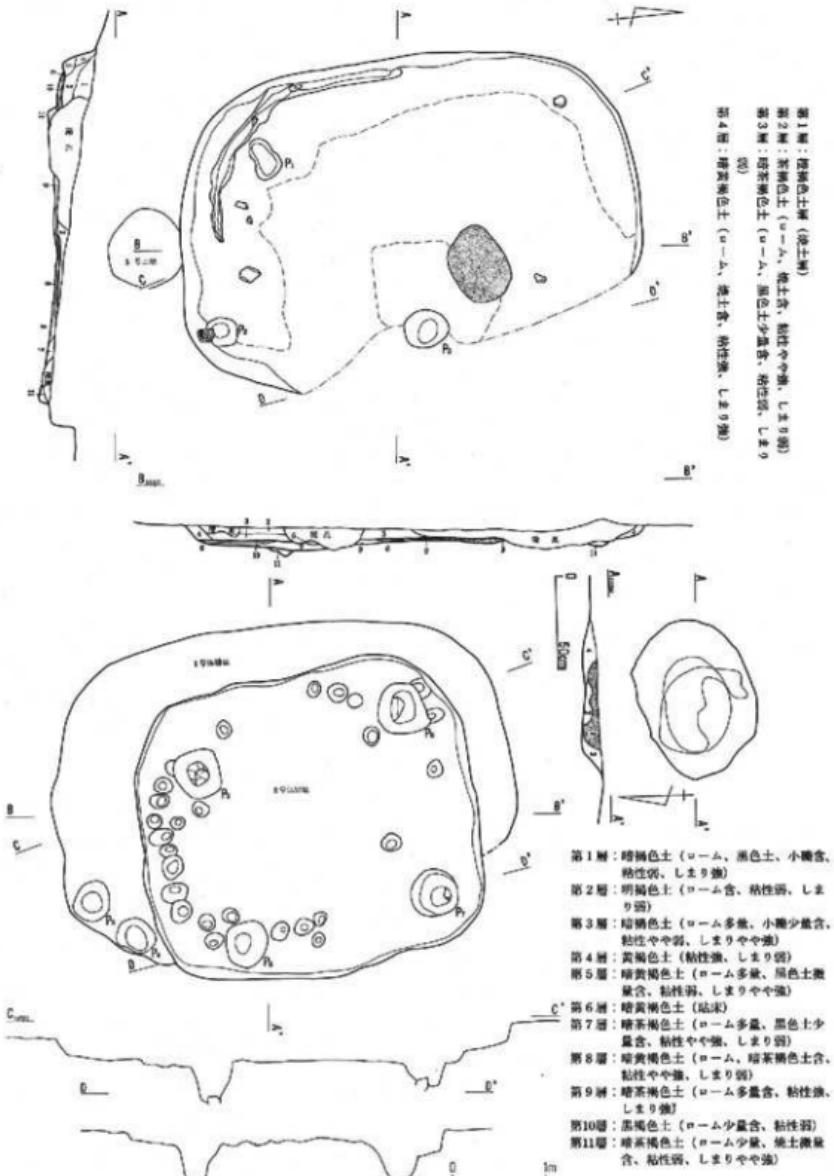
炉は中央部北寄りに築かれ、80×60cmの椭円形で深さ8cmを測る。断面形は浅鉢状を呈し、覆土は4層に分けられる。

掘り方は浅く平坦だがピット、土括等は確認できなかった。埋土は4層に分けられる。

出土遺物は極めて少なく図示し得たものは2点にすぎない。(第17図) (清水)

#### (2) 2号住居址(第4図、図版II)

5K、5L、6K、6Lグリットに位置する。1号住居址によって切られ、掘り方が遺存するのみである。平面形はほぼ隅丸方形を呈し、1号住居址床面精査時に遺存の悪かった部位とほぼ重複する。断面は中央部が高く周囲が低い凸レンズ状を示しており、規模は3.6m×3.2m



第4図 1号住居址及び掘り方、2号住居址 [1/60] 1号住居址炉 [1/30]

を測る。主軸方位はプラントでは、N—4°—Wであるが、柱穴の位置関係からは、N—9°—Wとなる。ピットは多数検出されたが、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>までが柱穴で、深さはP<sub>1</sub>—45cm、P<sub>2</sub>—44cm、P<sub>3</sub>—36cm、P<sub>4</sub>—48cmを測る。P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>7</sub>はローム層を掘り抜き含砾層まで達しており層中の礫を礫石として利用している。北西隅及び南壁沿いには小ピットが連続的に穿たれており、壁柱穴とも考えられる。1分住居址掘り方における中央部の掘り込みかとも考えたが、上軸方位のせり、柱穴の位置関係から、別個の住居址と認定した。

(清水)

### (3) 3号、4号住居址(第5図)

2B、2C、3B、3C、3Dグリッドに位置する。道路幅の発掘という制約もあり、全体の1/3程を掘り得たにすぎない。平面形は隅丸方形(隅丸長方形)を呈すると考えられ、規模は明確にし得ないがかなり大型で1辺8m以上の住居址と考えられる。主軸方位は柱穴の位置関係からN—6°—Wあるいは、N—84°—Eと推定される。壁高は南壁で80cm、北壁で20cmを測り北壁上部にかなり擾乱を受けている。壁上は7層に分けられ自然堆積を示す。床面は平坦で堅敏であるが北壁沿いでは一部軟弱である。柱穴は2ヶ所検出され、深さはP<sub>1</sub>—44cm、P<sub>2</sub>—42cmを測る。ピット、周溝等は検出されなかったが西壁沿いに2ヶ所、ローム溜りが認められた。

炉は中央部北寄りに築かれ、径100cmの円形で深さ15cmを測る。断面形は浅鉢状で覆土は4層に分けられる。

掘り方は住居址西半では浅く平坦だが東半へ向かい順次深く掘りこまれる。深さは床面より、—5~10cmを測り、埋土は5層に分けられる。

掘り方精査中、北東部で住居の床面と考えられる堅敏な面が検出された。このハード面は不定形で立ち上がり等は確認されず、また調査方法の未熟さとも相まって3号住居址掘り方底面との関係も明らかにし得ず3号住居址旧床面とすべきか、別個の住居址とすべきか判断に迷った。しかし3号住居址炉、掘り方埋土との関係、ハード面が同レベルで限定される事などから、別個に4号住居址と認定した。

3号住居址覆土上中からは大量の縄文式土器、土師器等が出土したが、床面からのものはほとんどが土師器であった。また床面から出土した34片の土器中、7片がS字状口縁を有する甕の破片であったが、図示し得たものは僅かであった。(第17図)

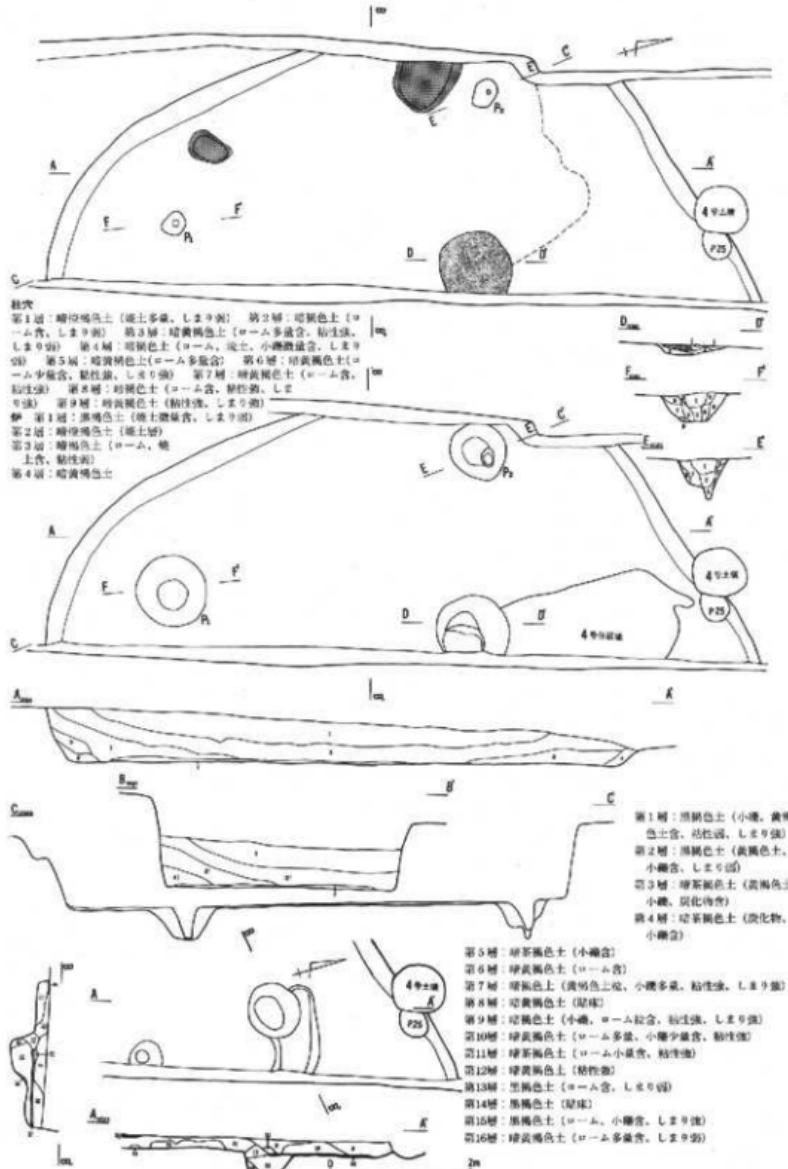
(清水)

## 2. その他の遺構

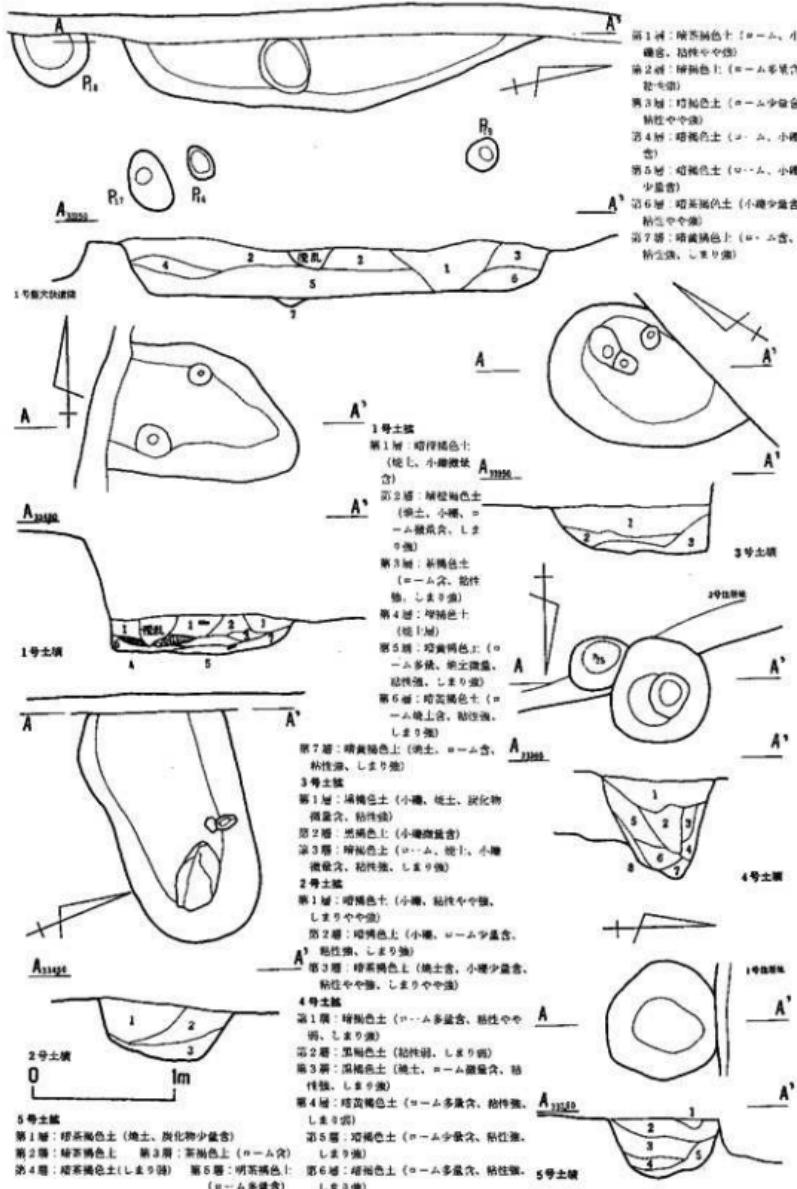
調査区域内から竪穴状遺構1基、土括5基、焼土遺構5ヶ所、小ピット25個が検出された。土括は總体的に規模が小さく、目立った遺物の出土も少なかった。焼土遺構も小規模であったが、焼土密度は比較的濃かった。

### (1) 1号竪穴状遺構(第6図)

3—Fグリッドに位置するが、そのほとんどが発掘区域外であり、全体の規模・形状は明確にし得ない。深さは28~35cmを測り、底面は貼床はされないが良好であり、深さ10cm程の円形



第5図 3号住居址及び掘り方、4号住居址、3号住居址炉 [1/80]



第6図 堅穴状遺跡及び1号～5号土壌 (1/40)

ピットが1基穿たれている。周囲からも小窓穴をとりかこむ様に4個の円形ピットが検出されたが、掘り込み面が共にⅢb層下部であり、全体の配置関係からも小窓穴と一体のものと認定した。深さは、P<sub>a</sub>=6cm、P<sub>b</sub>=18cm、P<sub>c</sub>=12cm、P<sub>d</sub>=14cmである。また本遺構上部Ⅲa～Ⅲb層中には本遺跡より多少北方向にずれ、3号焼土遺構が存在する。土層観察では多少疑問が残るが掘り込み面、プラン等確実な関連性も認められない為別個の遺構とした。  
（清水）

## （2）土 拾（第6図）

### （1号土拾）

2Bグリットに位置する。西半部が発掘区域外となり、形状・規模は明確でないが不整長円形を呈し短径は90cm程である。掘り込み面はⅢa層上面で、覆土は7層に分けられ、中下層では焼土の混入が顕著である。深さは約30cmで底面は鍋底状を呈し、小ピットが2ヶ所穿たれる。

### （2号土拾）

2C、3Cグリットに位置し3号住居址西壁と重なる。西端が発掘区域より外れるが長径180cm程の長円形を呈する。確認面に数個の石を伴なっているが、その性格は不明である。Ⅲa層上面より掘り込まれ深さは35cm程で覆土は3層に分けられる。

### （3号土拾）

4Hグリット西壁際に位置する。西端が発掘区域外に出るが180×90cm程の横円形のプランを有し、深さ45cm程で底部に浅いくぼみ3箇所が存在する。掘り込み面はⅢa層上面で覆土は3層に分けられ、焼土と炭化物が検出された。

### （4号土拾）

3Dグリットに位置し、3号住居址北壁を切る。Ⅲb層上部から掘りこまれ、径70cm程の不整円形を呈し深さは85cmを測る。東側に肩を有し二段に落ち込み、覆土は8層に分けられる。

### （5号土拾）

5Kグリットに位置し、1号住居址に一部を切られる。径80cm程の円形を呈し深さ40cm強を測る。IV層中から掘りこまれ底部は浅鉢状に傾斜する。覆土は5層に分けられ下層ではローム粒の混入が顕著である。覆土中より縄文時代前期に属する土器片が若干出土した。（田村）

## （3）焼土遺構（第7図）

### （1号焼土遺構）

3Dグリット、3号住居址北側で4号土拾に接して位置する。4号土拾の掘り込み面と同じⅢb層中に存在し、45×60cmの不整円形で東側に小突起を有する。浅い皿状で深さ10cmを測る。覆土は2層に分けられ焼土粒子を含む暗褐色土の上に高密度の焼土が乗る。

### （2号焼土遺構）

3号住居址、3E～4Eグリットの境界上に位置する。65×55cmの不定形プランを有し、西半部が一段深く掘り込まれ30cm弱を測る。覆土は3層に分けられ上層がより焼土の密度が高い。

### （3号焼土遺構）

3F、3Gグリットに位置する。IIIb層上面に存在し、aがbを切って設けられる。西半部が調査区域から外れており、全容をうかがう事は出来ないが、aは隅丸長方形、bは不定長円形のプランと思われる。a・b共に焼土混入土の堆積は薄く、bの方が焼土の密度が濃い。

尚3b直上から古墳時代初頭に比定される壺の完存品（第17図-5）が出土している。

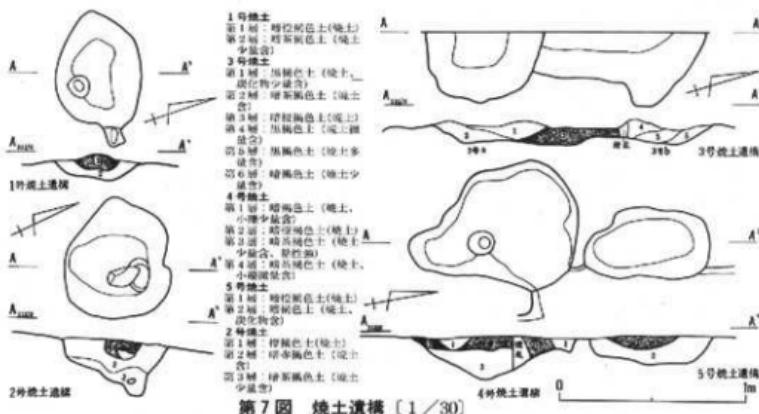
#### （4号、5号焼土遺構）

4Gグリットとなりあって位置する。

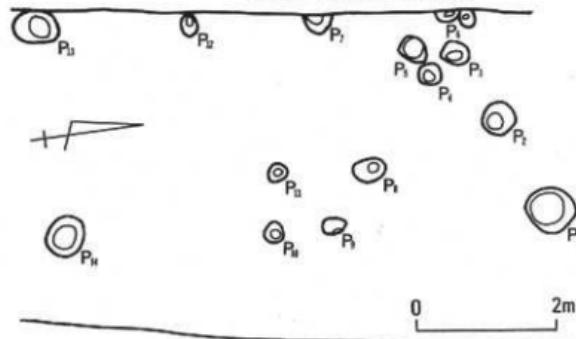
4号は90×60cmの不定形で、すり鉢状の掘り込みを有し20cm強の深さを持つ。覆土は4層に分けられ焼土は上層に多く検出された。

5号は35×65cm程の不整長円形で、深さ15cm程の皿状を呈する。覆土は2層に分けられ上層に焼土粒子が多い。

（田村）



第7図 焼土遺構 [1 / 30]



第8図 第1ピット群平面図 [1 / 80]

#### (4) ピット群

##### (第8図)

ピットは25個確認され規模は30~40cm程、深さは30cm以内のものが中心である。これらはその位置、層位から、おおむね3群に分けられる。

第1群は1号、2号住居址南の4I・5I・

4 J・5 J・5 K グリットにかけて位置する。形状は円～不整円形を呈し、規模は40cm前後、深さ30cm程ではほぼそろっている。また掘り込み面はIV層中で覆土は暗褐色土である。これらの具体的な性格は明確にし得ないが形状・覆土等から一体のものとしたい。

尚、本群のピットのいくつかからは、縄文時代前期前半、第II群第1類b種土器2片が出土している。(第9図-23・24)

第2群はNa16～19で3F、Gグリットに位置し、1号小窓穴に伴うものである。

第3群、3号住居址の北に散在する。形状・規模・掘り込み面等は一定せず時代・性格等は不明である。  
(田村)

## V 遺 物

### 1. 縄文時代の遺物

#### (1) 土器 (第9～14回、図版III)

総面積1,200m<sup>2</sup>あまりにわたる今回の発掘調査により、総破片数5,910片、総重量128.96kgを測る縄文土器が検出された。そのほとんどが2・3B～4・5Iグリットにかけての出土であり、道路幅という限られた調査区の中で偏在したあり方が観察された。時期的には、縄文時代早期前半～後期初頭におよぶ広い時間幅を有しており、土器形式も多岐にわたっている。

本報告では、これら出土土器のうち形式内容を明らかにし得たものについて、器形や文様などの特徴にもとづいて、第I群～第VI群に分類し、さらに各群について細分を試みた。

以下、各群ごとに説明を行うこととする。

#### 1. 第I群土器 (1～21)

縄文時代早期の土器を一括した。出土总数140片、総重量2.24kgを測る。4類に細分した。

##### 第1類土器 (1～5)

縄文時代早期前半、撚糸文系上器である。出土总数は10片とごくわずかである。

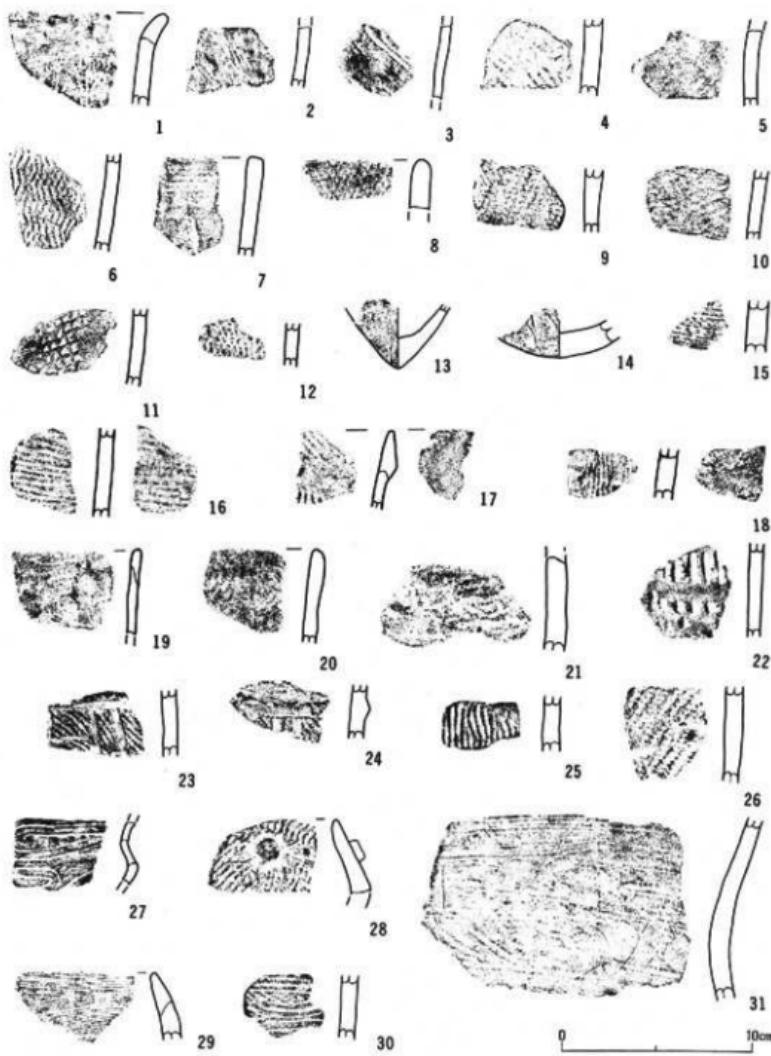
a種…撚糸文が施されるもの(1～3)。1は口縁部破片。やや外反する口縁上部が無文となるほかは、原体Lの撚糸文を縱・斜位に粗く施している。2・3は原体Rの撚糸文がまばらに施される。器厚は6～7mmと薄手であり、胎土に砂粒・白色不透明粒子などを含む。

b種…縄文が施されるもの(4・5)。4は比較的密に、5はまばらに施している。5は器厚8mm。灰茶褐色を呈し、胎土に砂粒・金雲母・石英を若干量含む。焼成は比較的堅緻。

##### 第2類土器 (6～14)

縄文時代早期前半、押型文系土器である。出土总数32片を数える。

a種…山形押型文が施されるもの(6)。図示したものがすべてである。6は太さ6mmほどの原体によって斜位の山形押型文が施された胴部破片であり、灰茶褐色を呈す。胎土に砂粒・石英・金雲母を比較的多く含み、器厚は8mmとやや厚手である。焼成は比較的堅くしまる。



第9図 縄文時代の遺物…土器(1) [1／3]

b種…平行する直線的な押型文が施されるもの(7)。図示した1片がすべてである。7は角頭状を呈する口縁部破片。長さ25mmほどの原体を縦方向に施文しており、口唇部は横方向に研磨される。胎土に砂粒・石英・金雲母を含み、色調はくすんだ灰褐色を呈する。

c種…格子目押型文が施されるもの(8~11)。総数28片を数え、本類の主体を占める。明瞭な格子目を呈するものは少なく、全体に粗雑な作りのものが多い。胎土に砂粒・金雲母・石英を多く含むものが一般的である。8は円頭状を呈する口縁部破片。11は一部が磨消されている。

d種…橢円押型文が施されるもの(12)。図示したものがすべてである。橢円の粒は2.5mm×1.5mmと小さく、胎土に金雲母を多く含む。器厚は7mm。焼成は良好とはいいがたい。

e種…底部を一括する(13・14)。13と14は本類に伴うと考えられる底部破片である。13は尖底、14は丸底状を呈する。灰茶褐色・くすんだ褐色を呈し、胎土に砂粒・金雲母を含む。

#### 第3類上器(15)

縄文時代早期前半、沈線文系土器である。図示した小片がすべてである。

15は斜方向の細沈線文が施される脇部破片。器厚は12mmと厚手であり、胎土に小礫・砂粒・石英を比較的多く含む。外面赤みをおびた茶褐色、内面くすんだ褐色を呈し、焼成はふつう。

#### 第4類土器(16~21)

縄文時代早期後半、貝殻条痕文系上器である。出土総数85片を数え、本群の主体を占める。器内外に貝殻による条痕文が残されるもの(16)。器外にのみ条痕文が残されるもの(17・18)、内外面ともに擦痕文のみのもの(19~21)の三者が認められる。このうち擦痕文のみのものが72片と主体的である。胎土に比較的多量の植物纖維を混入することを特徴とし、そのほかに砂粒・金雲母を含むものが多い。焼成は全体に良好とはいいがたく、概して脆弱である。

#### 第II群土器(22~51)

縄文時代前期の土器を一括した。出土総数110片、総重量3.68kgを測る。2類に細分した。

#### 第1類土器(22~26)

縄文時代前期前半の土器である。図示したものを含めて10片出土している。

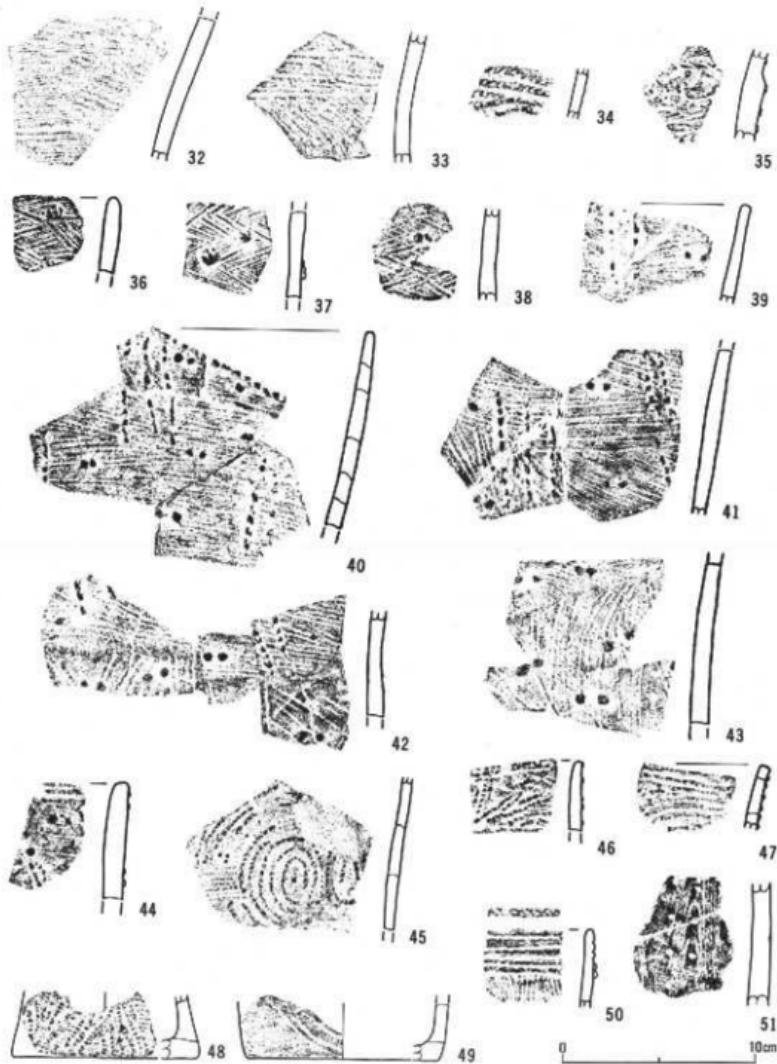
a種…櫛齒状工具による刺突文を特徴とするもの(22)。図示したものがすべてである。22は櫛齒状工具による縦位の刺突文を横方向に連ねる脇部破片である。器厚は6mmと薄手の作りであり、胎土に砂粒・白色不透明粒子などをやや多く含む。色調は淡い褐色を呈す。

b種…胎土に植物纖維を混入する縄文施文の土器(23~26)。23・24は同一個体の脇部破片である。原体R Lの単節縄文を地文として、禾本科植物によると考えられる特徴的な文様が描かれる。24には低い隆線が1条めぐる。胎土に植物纖維・砂粒・金雲母を含み、全体に脆弱である。25・26は原体R Lの単節縄文を斜・縦位に施文している。焼成は良好とはいいがたい。

#### 第2類土器(27~51)

縄文時代前期後半の土器である。出土総数は100片を数える。

a種…沈線文のみによって文様が構成されるもの(27)。図示したものがすべてである。27は



第10図 縄文時代の遺物…土器(2) [1 / 3]

ヘラ状工具による2本単位の沈線により曲線的な文様が描かれるもので、逆「く」の字状に張る脛部には綾杉状の短沈線文がめぐる。灰色をおびた明褐色を呈し、内面には赤色塗彩の跡をとどめている。胎土は砂粒・金雲母を若干量含むものよく精選されており、比較的しまっている。器厚4mmと薄手の作りであり、関西系の上器と考えられる。

b種…繩文を地文として、突起や沈線文が施されるもの(28~33)。28は波状を呈する縁部破片であり、波状部の下に突起状の貼付文がつけられる。地文はL.Rの半節繩文。29~33は沈線文が施されるもの。29は一部が小波状を呈する口縁部破片。30~33は半截竹管や櫛歯状工具による平行沈線文が横方向を中心で施される脣部破片。地文はすべてR.Lの半節繩文であり、沈線は全体に浅く粗雑なものがほとんどである。

c種…浮線文が施されるもの(34~35)。浮線文は低く扁平なものが一般的である。34は半截竹管による刺突文、35はヘラによる刻目文がそれぞれ浮線文上に施される。器面は内面を中心に比較的ていねいな調整が行われるが、作りは全体に良好とはいがたい。

d種…綾杉状の沈線文を地文としてボタン状の貼付文が加えられるもの(36~38)。36は半截竹管により刺突されたボタン状貼付文がつけられる口縁部破片。他は同種の脣部破片。内面を中心にしていねいな器面調整が行われるものが多く、概して比較的堅緻である。

e種…条線的な鋭い沈線文を地文としてソーメン状の浮線文が施されるもの(39~47)。39~43は同一個体である。大きな波状を呈し、直線的な浮線文とボタン状貼付文が施される。浮線文の上部と口縁上端部には結節状の刺突が加えられる。胎土は砂粒・白色不透明粒子・黒雲母を多く含み、全体にザラザラする。44~47は曲線的な浮線文が密に施されるものであり、44~46は半截竹管による結節状の刺突、47はヘラ状工具による刻目が加えられる。器厚はおおむね6~7mmと薄手。内面は比較的ていねいな調整が行われるもの、全体に粗雑な作りである。48と49は本種に伴う底部破片である。48は浮線文、49は曲線的な平行沈線文が施される。

f種…押圧繩文や撚糸文が施されるもの(50~51)。50は頭部に原体R.L.(?)の半節繩文を押圧した細い隆帯が1条めぐるもので、口縁部にはL.R.(?)の半節繩文によって3条の押圧繩文が、口唇部には同一の原体による斜位の押圧繩文がそれぞれに施される。脣部には撚りの細かいL.R半節繩文が施される。器厚6mmと薄手の作りであり、内面はていねいな器面調整が行われる。外面暗褐色、内面茶褐色を呈し、胎土に砂粒・黒雲母などを含む。51は原体Lの木目状撚糸文が施される脣部破片。灰茶褐色を呈し、胎土に砂粒・黒雲母・石英などを含む。

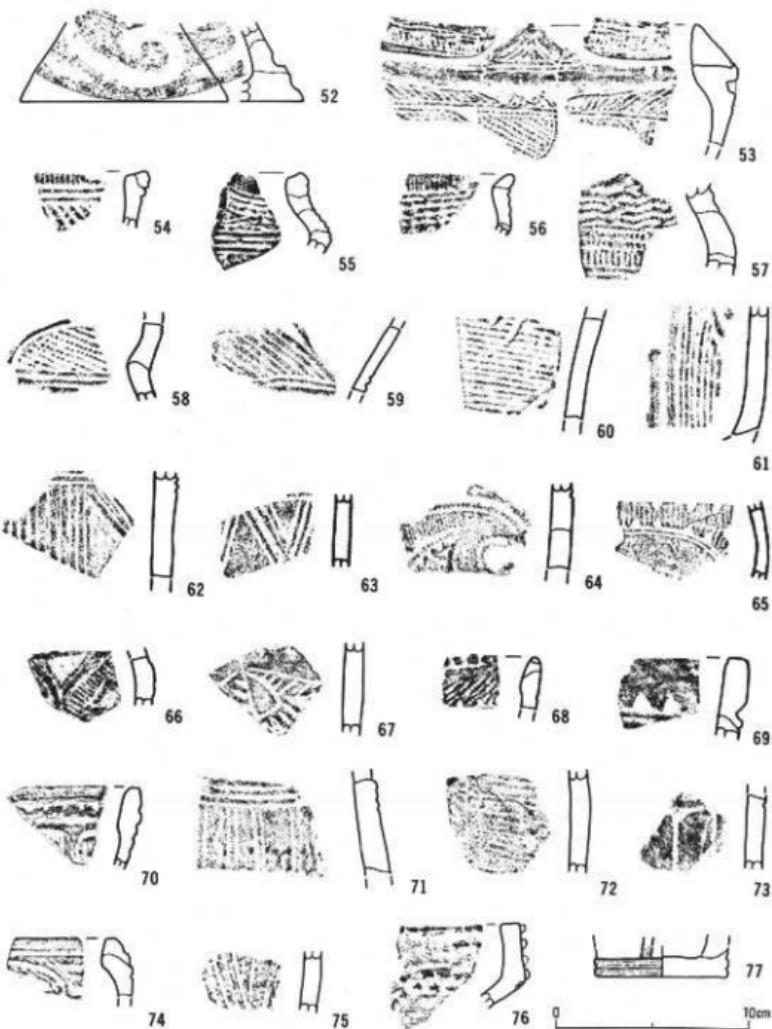
#### 第三群土器(52~77)

繩文時代前期末葉~中期初頭の上器を一括する。出土総数138片。総重量4.31kgを測る。

##### 第1類土器(52)

細い半截竹管による結節状の浮線文と印刻的な手法により文様が構成されるものである。

図示したものがすべてである。52は内傾して立ち上がる底部破片。満巻状の深い沈線が横方向にめぐり、器面には細い半截竹管による半隆起状の爪形浮線文が施される。胎土に砂粒・石



第11図 縄文時代の遺物…土器(3) [1 / 3]

英・金雲母などを多く含み、器壁は全体にザラつく。焼成はあまり良好とはいいがたい。

#### 第2類土器 (53~67)

集合沈線文や細線文によって特徴づけられるものである。

a種…集合沈線文によって文様が構成されるもの (53~63)。53は半截竹管による平行線文と印刻的手法により特徴的な文様が構成される口縁部破片。ゆるい波状を呈し、口縁の一部に三角形状の突起がつけられる。54~56は口縁上端部に爪形文がめぐる口縁部破片であり、55~56には半截竹管の凹面によって押し引き的な文様が施される。57~63は本類に伴う胴部破片。

b種…細線文によって特徴づけられるもの (64~67)。64は細い爪形文が加えられた半隆起状の区画内にハケ目状の細線文や截痕文、三角形・円形の印刻文が施される胴部破片。胎土に石粒・石英・黒雲母などを含み、全体にザラザラする。65は器厚6mmと薄手の胴部破片であり、結節繩文が施されている。暗褐色を呈し、胎土・焼成ともに比較的堅微である。

#### 第3類土器 (68~70)

沈線にそって沈刻文や刺突文が施されるものであり、図示したものがすべてである。68は口縁上部に縄文帯がめぐる。原体はL R単節縄文。69は器厚14mmと厚手の口縁部破片であり、沈線の上部にそって深い三角形印刻文がめぐる。70は沈線にそって竹管による交互刺突文が施される口縁部破片。全体に砂粒・石英などを多く含み、焼成はおおむねふつうである。

#### 第4類土器 (71~73)

第1~3類に伴うと考えられる胴部破片である。

71は結節繩文を地文として、半截竹管による浅い平行沈線文が加えられる。器厚13mmと厚手の作りであり、比較的硬くしまる。73は三角形状の抉り文の下に「Y」字状の沈線が垂下する。

#### 第5類土器 (74~75)

縄文を地文として、沈線文によって文様が描かれるものである。出土数は2片と少ない。

74は平線の口縁部破片。R L単節縄文を地文として、比較的太い沈線文が施される。器面は口唇部～内面を中心に横方向の研磨が行われる。75は同様の胴部破片。

#### 第6類土器 (76)

鉢形ないし浅鉢形土器である。

76は直立する口縁部に半截竹管による刺突のある貼付文が3条めぐる。器厚は12mmと厚手の作りである。胎土に砂粒・石英・白色不透明粒子を含む。焼成はふつう。

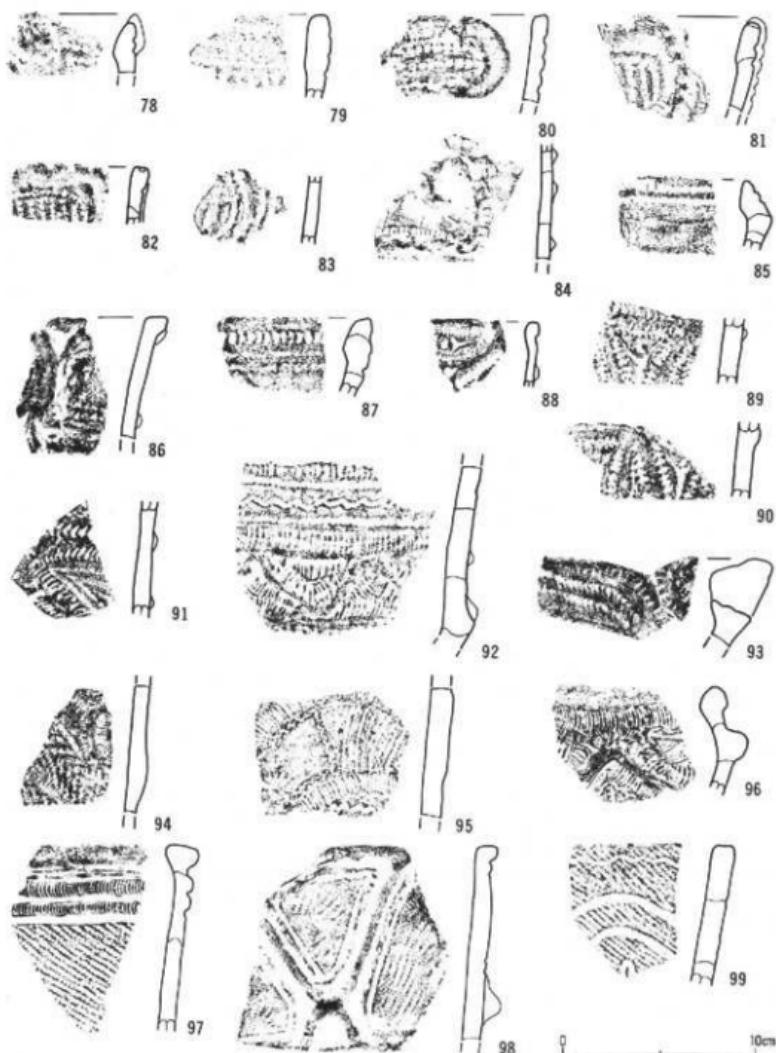
#### 第7類土器 (77)

底部破片である。

77は底部にそって半截竹管による平行線文が施されるもの。胎土・焼成ともに良好とはいいがたく、全体に粗く脆弱である。色調は茶褐色を呈する。

#### 第IV群土器 (78~109)

縄文時代中期前半の土器を一括する。出土総数965片、総重量31.27kgを測り、本遺跡出土上



第12図 縄文時代の遺物…土器(4) [1 / 3]

器の主体を占めている。4類に分類される。

#### 第1類土器 (78~85)

主に、楕円形区画により文様帯が構成され、角押文によって特徴づけられるもの。

78~82は深鉢形土器の口縁部破片。80~82は隆帯によって楕円形区画が施され、区画内に角押文を充填している。82はさらに口唇部にも交互刺突文と1列の角押文が加えられる。84は耳たぶ状の突起がつけられる胸部破片。85は浅鉢形土器の口縁部破片であり、内傾する口縁部にそって2条の角押文がめぐる。胎土に砂粒・白色不透明粒子を多く含むものが一般的であり、全体にザラザラする。焼成は概して良好とはいがたい。

#### 第2類土器 (86~93)

主に、重帯する三角形区画により文様が構成され、いわゆる三角押文が施されるもの。

86~88は深鉢形土器の口縁部破片。86は隆帯にそって2列の三角押文が加えられる。88は器厚6mmと薄手の口縁部破片であり、半円状の隆帯区画内に玉抱き三叉文と一列の三角押文が施される。89・90は玉抱き三叉文が施される胸部破片。91は幅狭の三角形横帯区画文が施される底部付近の破片。キャタピラ状の爪形文に波状沈線文が加えられるなど本類の中でも比較的新しい様相を呈している。93は浅鉢形土器の口縁部破片。口縁にそって2列の三角押文がめぐり、一部が突起状をなす隆帯によって区画される。

#### 第3類土器 (94~104)

種々の区画文や抽象文が施されるもので、爪形文やキャタピラ文が多用される。

94と95は抽象的な文様が構成される胸部破片。96は隆帯にそってキャタピラ文・沈線文が施される口縁部破片であり、ゆるい波状を呈する。97は口縁部に爪形文の施された隆帯が2条めぐるもので、胸部にはR Lの単節繩文が横方向に施文されている。98は区画文の施される口縁部破片。区画内にはR Lの単節繩文が施される。100はゆるい波状を呈する口縁部破片であり、幅広の扁平な隆帶上にR L単節繩文を施している。101~103は半截竹管による半隆起区画の中に三叉文や交互刺突文・浅い爪形文が充填されるものである。全体に、ていねいな器面調整を施しており、とりわけ内面には研磨が加えられる例が多い。

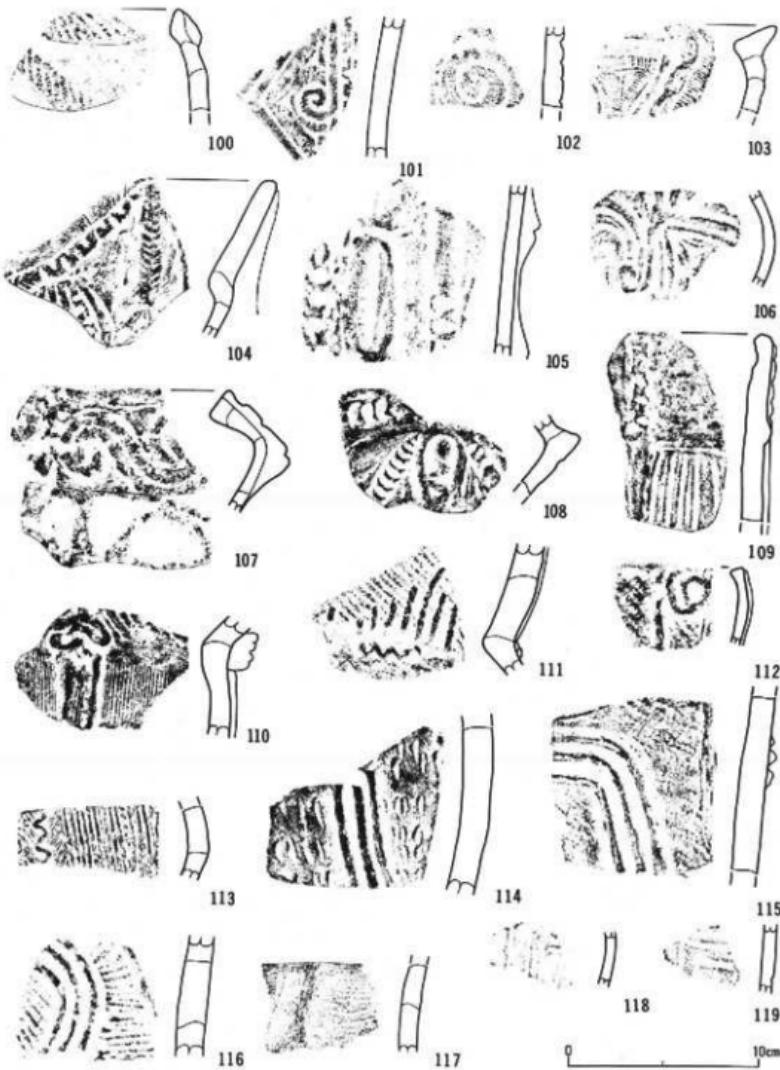
#### 第4類土器 (105~109・120)

刻目のある太い隆帯や扁平な貼付文により、大柄な文様が構成されるものである。

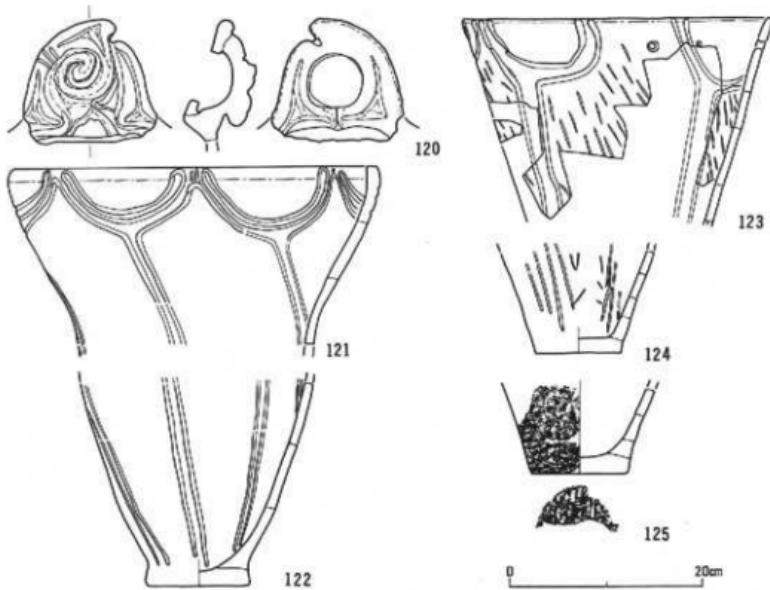
106は器厚6mmと薄手の胸部破片。肉彫り風の文様が施されるもので、内面は横方向を中心とする研磨が加えられる。107は屈曲する口縁部に「S」字状の低い隆帯が貼付けられるものである。焼成は概して不良で全体に脆弱である。109は口縁部に幅広の無文部が残されるもので、第V群土器の一部に近似する様相を呈している。120は本類に伴う突起部。内部が中空状をなし、表裏に三叉文や渦巻状の隆帯が施される。胎土に白色不透明粒子・砂粒を比較的多く含む。

#### 第V群土器 (110~117・121~125)

純文時代中期後半の土器である。出土総数541片、総重量26.02kgを測り、第IV群土器に次ぐ



第13図 縄文時代の遺物…土器(5) [1 / 3]



第14図 繩文時代の遺物…土器(6) [1 / 6, 120は1 / 3]

出土量を占めている。

110・111はいわゆる重弧文が施されるもの。112はやや内彎する平縁の口縁部破片であり、原体L Rの単節縄文を地文として細い粘土紐を貼付けている。114～116はそれぞれ、刺突文、R L単節縄文、放射状の太い沈線を地文として、3本1組の隆帯が施される胴部破片。117は櫛齒状工具による細い鋭い条線を地文として、低い隆帯が施される。121と122は同一個体の深鉢形土器であり、器高推定41.5cmを測る。口縁部に施された7単位の弧状沈線文からそれぞれに2条の沈線文が垂下する。全体にていねいな器面調整が加えられており、とりわけ外面下部は部分的に縱方向の研磨が行われる。色調は明褐色ないしきすんだ褐色を呈する。123は口径推定32.2cmを測る深鉢形土器であり、ほぼ直線的にすぼまる器形を呈する。ヘラ状工具による鋭い短沈線を地文として、121・122に類似した文様が描かれる。器面は外面を中心にしていねいな調整が行われる。124と125は底部破片。125は底面に「2本越え・1本潜り・1本送り」の網代痕をとどめている。

#### 第VI群土器 (118・119)

縄文時代中期末葉～後期初頭の土器を一括する。図示したものを含めて3片出土している。118・119はともに磨消縄文が施される胴部破片である。縄文原体はL Rの単節縄文。器厚は

6～7mmと薄手の作りであり、色調はくすんだ褐色・灰褐色を呈す。胎土は砂粒などを若干量含むものの、比較的よく精選されている。焼成はおおむねふつうである。

#### まとめ

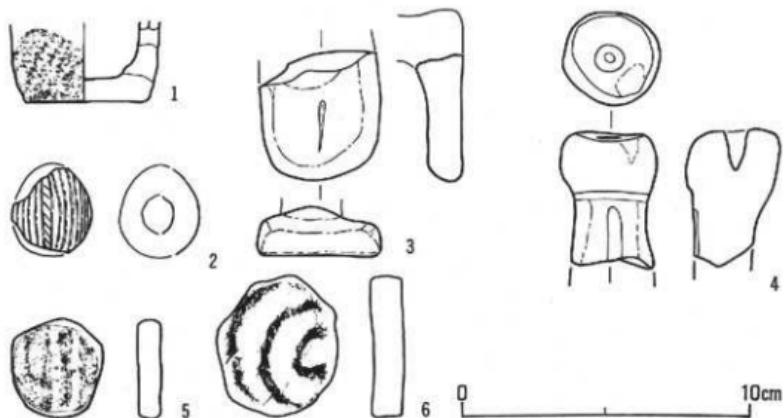
- 1) 第I群土器について 繩文時代早期の土器である。早期前半、撫糸文系土器、押型文系土器、沈線文系上器、早期後半、貝殻条痕文系土器と多岐にわたる土器群が検出されている。これら土器群は今日縦年的位置づけに関してなお多くの問題点を内包しており、ここでは早期前半に比定される粗雑な格子目押型文と早期後半に比定される擦痕文のみが残される貝殻条痕文系土器とが比較的まとまって出土していることを提示するにとどめる。
- 2) 第II群土器について 繩文時代前期の上器である。第1類a種は神の木式、同b種は黒浜式、第2類b・c種は語磯b式、同d・e種は語磯c式にそれぞれ相当するものと考えられる。第2類a種と同f種は縦年的位置に不明瞭な点を残すものの、それぞれ第2類土器に伴う關西系及び東北北部に系統的につながる土器と考えられ、きわめて注目される。
- 3) 第III群上器について 繩文時代前期末葉～中期初頭の土器である。第1類上器は十三告提式、第2～4類上器は五領ヶ台I式、第5類土器は五領ヶ台II式に第6・7類上器はおおむね五領ヶ台I～II式にそれぞれ相当するものと考えられる。
- 4) 第IV群上器について 繩文時代中期前半の土器である。第1類土器は貉沢式、第2類土器は新道式、第3類土器は藤内式、第4類土器は井ノ尻式にそれぞれ相当しよう。
- 5) 第V群土器について 繩文時代中期後半の土器である。すべて曾利式に相当する。図中110～113は曾利II式、114～116は曾利II～III式、117は曾利IV式に、121～124は曾利V式にそれぞれ比定される。
- 6) 第VI群土器について 繩文時代中期末葉～後期初頭の土器である。称名寺式に相当するものと考えられる。

（百瀬）

#### (2) 土製品（第15図）

1はミニチュア土器の底部である。底径4.2cmを測り、外面にRL単節繩文を斜位に施している。2・3はそれぞれ、上鉢の一部、土偶の脚部と考えられる。4は男根状を呈する土製品の先端部である。現在長4.8cmを測り、胎土は石英・黒雲母・金雲母の混入が顕著である。太い沈線が頭部を半周し、胴部を垂下している。第IV群土器の比較的古い時期に伴うものと思われる。上製円板は総数21個出土している。全て繩文時代中期のもので直径4～5cmのものがほとんどであり、平均重量は2.5g程度を測る。

（田村）

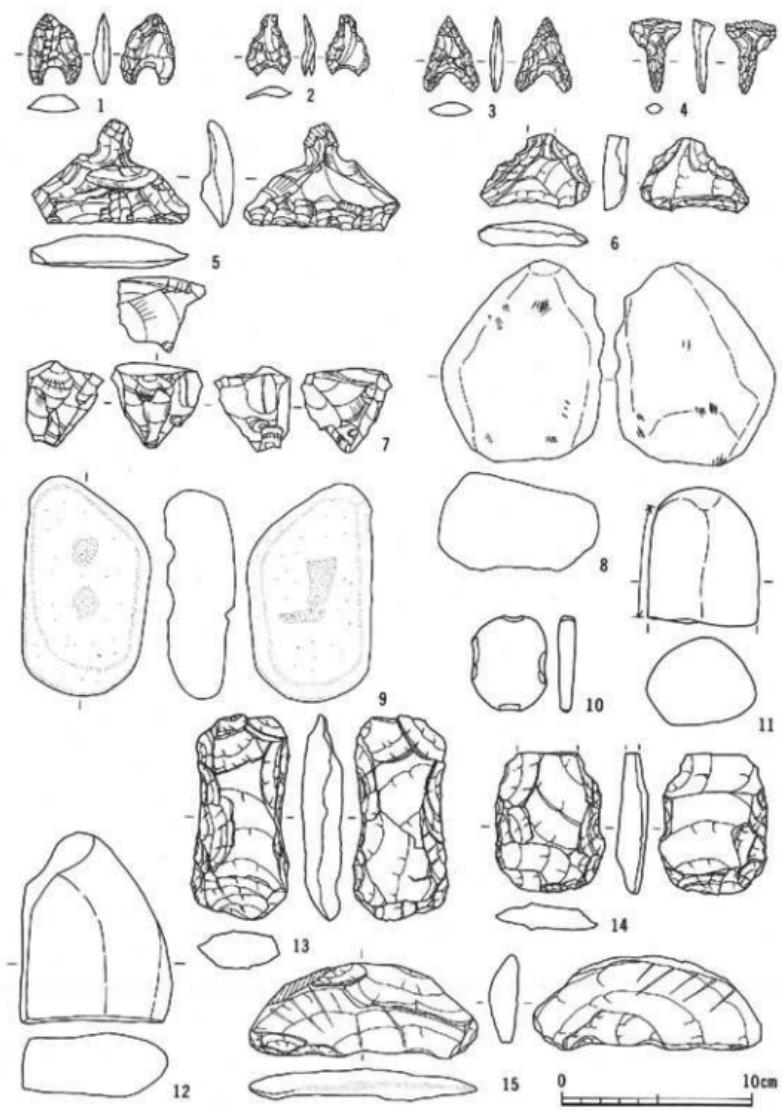


第15図 繩文時代の遺物…ミニチュア土器・土製品 [1 / 2]

(3) 石 器 (第16図・図版IV)

本遺跡出土の石器類は、剝片類を含めて総数736点である。これらの石器は、伴出土器や石器の特徴等から、その多くは縄文時代中期に属するとと思われる。出土石器の組成は以下の様になっている。打製石斧22、横刃形石器2、石匙2、粗製石匙6、石皿2、敲石3、磨石2、凹石3、礫器3、石錐3、ストーンリッタチャーチ1、石鏃23、石錐未製品2、加工痕ある剝片12、石核3、使用痕ある剝片9、剝片類638。以上の石器組成を見ると、骨根遺跡の石器群の特徴として、石鏃、加工痕ある剝片を含めた石器未製品、剝片類の多数の出土、をあげることができる。また石器類は、約250点が3号住居址覆土から出土している。以下、本遺跡出土の石器について説明する。

1. 石鏃 5Hグリット出土。石質：黒曜石。
2. 石鏃 5Hグリット出土。石質：黒曜石。裏面左側にバルブがあったが、そこに調整を加えている。素材となった剝片は、バルブを有する不整形剝片であったと思われる。
3. 石鏃 3Eグリット出土。石質：黒曜石。
4. 石錐 5Jグリット出土。石質：黒曜石。明確なつまみ状の頭部と錐部を有する。調整は頭部上面の節理面を除いた全ての部分に施されている。図示されたもの他に同様のものが2点出土している。
5. 石匙 4Fグリット出土。石質：チャート。左下端欠損。横型石匙。図示した他に、縦型石匙（黒曜石製）が1点出土している。
6. 粗製石匙 C2グリット出土。つまみ部分欠損。図示したものは横型であるがこの他に、横型3点縦型2点が出土している。これらの欠損状態を観察すると、つまみ部だけのもの1点、



第16図 縄文時代の遺物…石器 [1／3、1・2・3・4・5・7は2／3]

つまみ部分欠損5点、である。

7. 石核 3号住居址覆土出土。石質：黒曜石。
8. ストーンリッチャード 3E グリット出土。石質：凝灰岩。
9. 凹石 3号住居址覆土出土。石質：砂岩。円錐の表裏に2個づつ凹部分がある。
10. 石鍤 3E グリット出土。扁平な円錐を素材とし、長軸の両端および、短軸の両端に、敲打によって縦掛け部分を作り出している。
11. 敲石 3F グリット出土。実測図左側に敲打痕がある。
12. 石皿 4H グリット出土。石質：砂岩。表、裏ともによく磨れている。
13. 打製石斧 3D グリット出土。短冊形。曾根遺跡から出土した打製石斧は、全て短冊形である。
14. 打製石斧 3F グリット出土。石質：砂岩。基部欠損。
15. 横刃形石器 3号住居址覆土出土。横刃形石器は図示したもの他1点出土している。

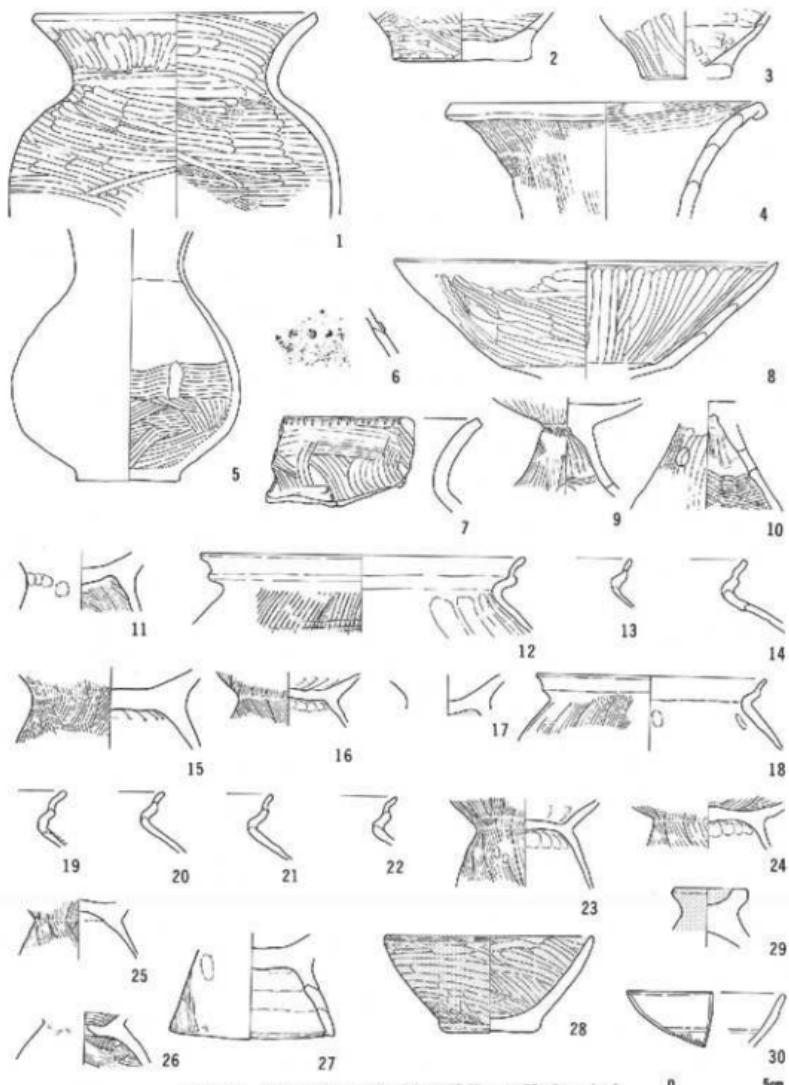
(大森)

## 2. 弥生時代・古墳時代の遺物 (第17図・図版Ⅲ)

壺 1は胴部上半部1/4残存。胎土、焼成良好。色調赤褐色。外面頸部は斜位、胴部は横位のヘラミガキ内面ハケ後ヘラミガキ。2・3は底部。共に胎土、焼成良好。色調2は赤褐色3は暗赤褐色。外面は共にヘラミガキ内面2はヘラミガキ3はヘラナデ。4は頭部～口縁部1/4残存。胎土粗。焼成良好。色調淡褐色。内外面共に粗いハケ口唇部はナデ。5は口縁部欠、最大径(12.1cm)を胴部下半に持つ。胎土粗。焼成良好。色調橙褐色～茶灰色。外面風化激しく不明(ヘラミガキか)内面頸部縦位ヘラミガキ胴部上半ナデ同下半ハケ。底部に木葉痕。6は肩部破片。胎土粗。焼成良好。色調橙褐色。円形浮文が列状に並ぶ。外面赤色塗彩。7は口縁部破片。胎土粗。焼成良好。色調茶褐色。外面横位～斜位内面横位の櫛状工具による調整。口縁刻目。

高坏 8は壺部1/4残存。胎土、焼成良好。内外面ヘラミガキ。9・10は脚部。胎土、焼成共にはほぼ良好。9は4穴、10は3穴を有する。外面9はハケ後ナデ。10はヘラミガキ後ナデ。内面は共にナデ後ハケで9はシボリ痕が顕著である。

甕 11・17・23～27は台付甕脚台部。11は胎土、焼成良好。色調赤褐色。外面ナデ内面ハケ接合部押えの指痕痕が残る。17は胎土、焼成良好。色調橙褐色。内外面ナデ。脚部内面に赤色塗彩。23～25はS字口縁甕の脚台部。胎土粗く砂粒を含む。焼成良好、色調赤褐色で黒ずむ。外面斜位の粗いハケ内面23はヘラナデ、オサエ。24・25はハケ。26は胎土粗。焼成良好色調赤褐色外面ナデ内面ハケ。甕底に焼成後穿孔。27は胎土、焼成良好。色調赤褐色。外面ナデ後ハケ内面ナデで輪積み痕が残る。12～14・18～22はS字口縁甕の口縁部。全て胎土粗く砂粒を含み、焼成は良好。12は1/4残存、色調褐色で黒ずむ。外面斜位の粗いハケ肩部に横ハケ内面ナデ口縁部内外面共に強い横ナデ。13は色調淡褐色で黒ずむ。外面斜位にハケ内面ナデ。14は色調淡赤褐色で内面は黒色味が強い。外面斜位のハケ肩部に粗い横ハケ。18は色調淡茶褐色で黒



第17図 弥生時代・古墳時代の遺物…土器 [1 / 3]

0 5cm

ずむ。外面斜位のハケ。19は色調淡赤褐色で内面は赤色味が弱い。外面斜位の粗いハケ。20は色調淡褐色で内面は黒ずむ。外面斜位のハケ肩部に横ハケ。21は色調淡茶褐色で黒ずむ。外面斜位のハケ肩部に粗い横ハケ、口縁部強いヨコナデ。22は色調淡茶褐色。外面斜位のハケ。

鉢形土器 28、1/3が残存。胎土粗。焼成堅敏。色調赤褐色内面に黒斑。内外面共にヘラミガキ口縁部外面ミガキ後ナデ。焼成前に赤色塗彩。

蓋 29、つまみ部のみ残存。胎土、焼成不良。色調淡褐色。外面ナデ、つまみ部外縁に指痕痕。内外面に赤色塗彩。

青磁碗 30、同安窯系の青磁片。焼成型織で内外面淡緑色釉が施される。回転ロクロ成形後、体部回転ヘラケズリ。内面は下部に一条の沈線を巡らし、その下位に櫛目文が施される。

1・2・3・12~14・17~18は3号住居址出土、16は同床面から出土。6は1号住居址掘方、11は同床面から出土している。他はB~F区Ⅲa層~Ⅲb層中よりの出土である。

本遺跡出土の弥生時代・古墳時代の上器は、破片総数約2000点を数える。内訳は壺形土器片780余点、壺形土器片890余点、内S字口縁甕破片180余点、不明、その他300余点であったが、図示し得たものは僅かであった。また年代的にはほぼS字口縁甕を伴う時期と考えられるが、弥生時代後期に遡るもの(7)、弥生時代の伝統を強く残すもの(28)も含まれる。S字口縁甕は肩部に横ハケが頭著に走るもの、やや少なくなるもの、全く施されないものという三者が認められたが、断片化が進んでいる為、器形・口縁形態・胎土・焼成等を含めた検討を深めるまでには至らなかった。今回は概略のみの報告にとどめ、詳細な分析は他日を期したい。(清水)

## VI 成 果 と 課 題

今回の発掘調査は道路幅という限定されたものであったにもかかわらず、多量の遺物が出土し、多数の遺構を検出することができた。まず遺物であるが、縄文時代早期に属するものから中世に属するものまで多量の土器・石器類が出土している。なかでも中心となるものは縄文時代中期のものと、古墳時代初頭のものとある。層位的にはⅢa層~Ⅲb層より集中して出土し、Ⅲa層からは縄文時代・弥生時代~古墳時代の遺物が共に出土するが、弥生時代~古墳時代の遺物はⅢa層下部からⅢb層ではその数を減し、Ⅳ層中からは、縄文時代の遺物が散見するにすぎない。平面的には発掘区南半部のB~Iグリットに集中し、Jグリット以北では急激に減少する。

検出された遺構は住居址3(4基)、土括5基、竪穴状遺構1、焼上遺構5、ビット25を数えた。これらを覆土、掘り込み面、切り合ひ関係等から相対的な時間差を検討すると、5号土括、第一ビット群→竪穴状遺構→住居址→4号土括、焼上遺構群→1~3号土括の順に築かれたと想定しうる。

ところで、本遺跡からの遺物の出上はほとんどが包含層からであり、遺構に伴うものはごく

僅かである。第17図、5は3号焼土遺構から、同一1・16は3号住居址覆土下層～床直より出土しており、同住居址からはS字口縁甕破片も出土している。またピット14からは第9図23・24が出土している。従って、住居址及び焼土遺構群は古墳時代初頭—S字口縁甕を伴う時期—第1ピット群、5号土括はそれぞれ縄文時代前期前半の所産と考えたい。

縄文時代の遺物についてみると、先にも示したように総破片数5910点、総重量128.96kgを測る縄文土器と総数736点を数える各種の石器類が検出された。そのほとんどが包含層からの出土であり、2・3B～4・5Iグリットにかけて偏在したあり方を示し、1m<sup>2</sup>あたりで約0.9kgという濃い密度を示していたことが注目された。

また石器類も多種類にわたって出土したが、石器総数の中に占める石刀の量、製品に対する未製品の割合、2・3B～4・5Iグリットに見られたチップの出土量等、本遺跡に於ける一つの特色と考えられよう。それらの具体的な内容については前に述べた通りであるが、縄文時代早期前半～後期初頭までと広い時間幅をもっており、長期にわたる多様な活動が本遺跡とそれをとりまく自然的・社会的環境の中でなされたであろうことを如実に物語るものであったと言える。

本遺跡から出土した縄文時代の遺物の大半は厳密な意味での原位置を保っているとは考えられず、その時期・原因は不明としつつも二次的な堆積とするのが自然であろう。が逆に遺物の密集度、破片の大きさ等から考えて、本遺跡の中心部は今回の発掘区からさほど距離を離れているとも考えがたい。ところで、本遺跡は前述した様に断層崖下部に発達した台地上に立地しているのであるが、この断層崖は何段かに亘って緩傾斜面をテラス状に形成しており、遺跡の占地する台地はその最下段にあたる。従って本遺跡における縄文時代の遺物の大半は今回の発掘区ののる台地の更に上段からの流れ込みとするのが最も自然であり、本遺跡上方にはかなり良好な遺跡の存在が予想される。道路幅というきわめて限定された発掘区域にとどまつたことや縄文時代に属する明瞭な遺構が検出されなかったことから、縄文時代前期後半の第II群第2類b～d種土器の多くが4・5H・1グリットを中心にまとまって出土したという事実以外に、こうした遺物のあり方のもつ意味や性格、あるいはさらに進んで本遺跡自身の持つ意義について明らかにするための資料をえることはできなかつたが、今回の調査区の上方に存在していると推測される遺跡の性格・内容を理解する上での鍵を提供することができたものと考えられる。

一方、本遺跡の主体者としての位置を占めている古墳時代の遺構・遺物についてみると、まずこの台地上に集落の存在を確認し得たものといえよう。規模・面的な拡張性は不明であるが、台地自身の規模に規定され、小集落を予想するのが妥当であり、今回の発掘区を頂点とし東方に展開するものであろうか。また集落の内容・性格は一切明らかにし得なかつたが、3号住居址が一辺8mを超すと想定し得ること、住居址掘りこみ面上に存在する焼土遺構等、興味深いあり方といえよう。櫛形町周辺には本遺跡の他に六科山遺跡、住吉遺跡とその規模・立地を異としつつ、弥生時代末～古墳時代初頭の集落遺跡が存在する。また内容は明らかでないものの、

本遺跡と立地条件を同じくする曲輪田、北新居、神明遺跡等も確認されており、それらとの時代的・性格的比較・検討も興味深いところである。

またS字口縁甕について、本遺跡の中心となるものはいわゆるb類に属するものと考えられるが器形・調整等の分析、壺・高环等共伴する土器との検討を進めたい。近接する六科山遺跡、住吉遺跡出土品との比較、更には西田・姥塚・大塚・東久保遺跡等、県内他遺跡出土品との比較・検討等、新たな課題を提供し得たものと考えられる。<sup>註8</sup>

S字口縁甕を伴う時期と想定される本集落の存在は、その性格・内容を明確にはし得なかつたものの、陝西地区における当該期の資料的空白をうめるものと考えられるとともに、山梨県全体の古墳時代の成立を考えるうえでも新たな問題をなげかけたものといえよう。

(百瀬・清水)

#### （註）

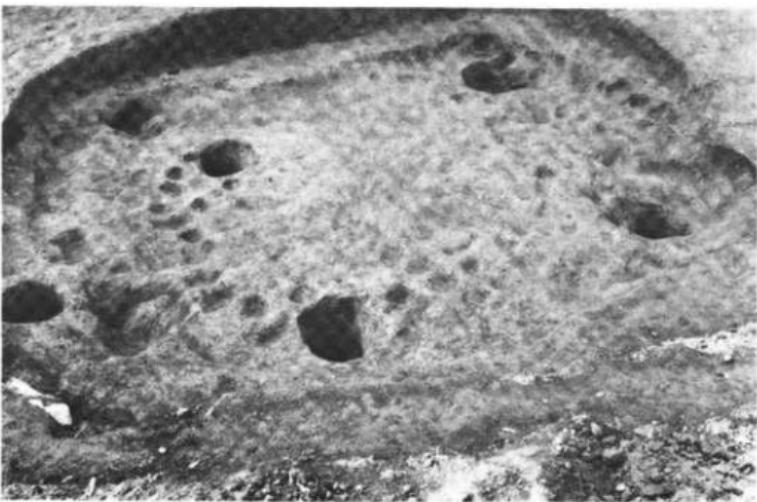
- 註1 文化庁文化財保護部『全国遺跡地図－山梨県』 国土地理院会 1981  
註2 故野勝彦他「桶形町平城探査の土器について」『丘城』 1-3、4 1977  
註3 住吉遺跡調査団「住吉遺跡、甲西町教育委員会 1981  
註4 桶形町誌編纂委員会「桶形町誌」1966  
註5 松浦宥一郎他「物見塚古墳」桶形町教育委員会 1983  
註6 六科山遺跡調査団(团长: 関根孝夫氏)の御教示による。尚本遺跡の報告書は1984年度末に刊行予定である。  
註7 註3と同じ  
註8 人參義一「S字状・口縁土器等」いちらみや考古 No.13  
註9 新津健氏の御教示による。住吉遺跡隣接地より出土しているとの事である  
註10 新津健氏の御教示による。尚本遺跡の調査報告書は1984年3月末に刊行される予定である。

#### （参考文献）

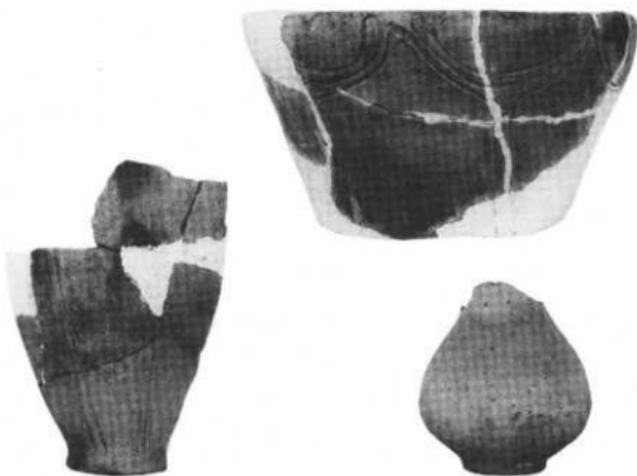
- 山梨県立山梨高等学校『桶形山の自然』編纂委員会『桶形山の自然』 1976  
山梨県考古学協会『山梨の遺跡』 山梨日日新聞社  
萩原二雄他『京原』 山梨県教育委員会 1974  
関根孝夫他『六科丘』 1983  
八王子市郷土資料館『三~四世紀の東国』 1983  
鈴木保成『一色遺跡』 村山川県教育委員会 1980  
神村透『桶越遺跡発掘調査報告書』 長野県木曾郡下条村教育委員会 1982  
谷井赳他『研究紀要』 対団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982  
山口明『純文時代中期初頭土器群における型式の実態』 関西県考古学会シンポジウム 4  
『純文土器の変遷とその背景ー特にその中期初期の土器群をとおしてー』 関西県考古学会 1980  
八王子市郷田遺跡調査会『神谷丘Ⅱ』 1982  
二宅義也『門田土器』『純文文化の研究3 純文土器Ⅰ』 1982  
佐々木秀雄他『向原遺跡、第1分冊』 神奈川県教育委員会  
江坂寅彌編『石神遺跡、円鏡土器文化の発展的研究』 ニーサイエンス社  
大暮義一『弥生式土器から土器源へ』 名古屋大学文学部研究論叢  
山梨県遺跡調査団『西田遺跡』 第一次発掘調査報告書 1978  
九州歴史資料館『太宰府跡』 昭和52年度発掘調査概報 1978



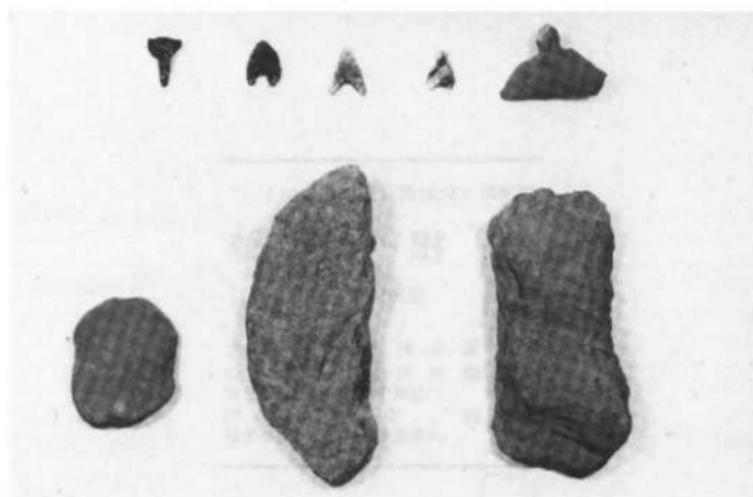
図版 I 遺跡遠景（南西方向より）



図版 II 第1号・2号住居址



図版III 出土遺物…土器



図版IV 出土遺物…石器

---

櫛形町文化財調査報告書 No.1

## 曾根遺跡

昭和59年3月31日発行

編集者 櫛形町教育委員会

発行者 櫛形町教育委員会

山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原

印刷野 中印 刷

山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原

---

